

宮城県レッドリスト 2021 の公表にあたって

宮城県希少野生動植物保護対策検討会
会長 鈴木孝男

宮城県レッドリストの改訂

宮城県では、県区域内に生息・生育する野生動植物種の現状を把握するとともに、特に緊急に保護することが必要な野生動植物(希少野生動植物)について、東日本大震災の状況を一部反映させた、「宮城県の絶滅のおそれのある野生動植物—レッドデータブック2016」(RDB2016)を、平成 28 年(2016 年)3 月に発行した。

しかし、希少野生動植物の状況はその後も日々変化しており、東日本大震災以降は特に著しいものがある。そのために、震災後の野生動植物の生息・生育状況等を把握し、本県の野生生物保護行政の諸事項に関する基礎資料とするとともに、次期レッドデータブック改訂版作成のための情報の蓄積を意図して、宮城県は宮城県野生動植物調査会に、野生動植物の生息・生育状況調査等業務を 2017 年から継続して委託している。

宮城県野生動植物調査会では調査のために9つの分科会を設置し、植物(蘚苔類と維管束植物)、植物群落、哺乳類、鳥類、両生類・爬虫類、汽水・淡水魚類、昆虫類、海岸地域の無脊椎動物類(底生動物)、陸域地域の無脊椎動物類(淡水貝類)のそれぞれについて、県内における調査を続けてきた。今回、大震災から 10 年目を迎え、先の RDB2016 の発行から 5 年目となる機会に、これまでの調査結果を踏まえて、レッドリストの改訂版を作成し、宮城県レッドリスト 2021(RL2021)として公表することになった。調査を実施した「宮城県野生動植物調査会」から提出された RL2021(案)について、「宮城県希少野生動植物保護対策検討会」において内容を精査し、体裁を整えた上で今回公表するものである。RL2021 と RDB2016 におけるカテゴリー別の掲載種数を比較したものを表1に示す。また、以下には改訂結果の概要を記す。

植物の概要

維管束植物では、新規に絶滅が確認されたのが 6 種あるなど、絶滅種(EX)が 19 種となった。今回の見直しの過程では新規に選定された種が多く、絶滅危惧 I 類(CR+EN)で 12 種、絶滅危惧 II 類(VU)で 34 種、準絶滅危惧(NT)で 62 種であった。このため、RDB2016 では 513 種であったレッドリスト種は改訂版の RL2021 では 613 種に増加し、1.19 倍になった。この他、見直して絶滅危惧危険度のカテゴリーが引き上げられたのが CR+EN で 18 種、VU で 13 種、NT で 17 種あり、下げられた種は CR+EN からは 16 種、VU からは 5 種であった。このようにカテゴリーが危険度の高い方に引き上げられた種が多かった。

蘚苔類では新規に加えられたのは情報不足(DD)の1種のみで、他にはカテゴリーが引き上げられたのがCR+ENで2種、引き下げられたのはNTで1種であった。RL2021でのレッドリスト種は43種であった。

植物群落の概要

植物群落では今回の見直しにおいて、単一群落で2カ所、群落複合で4カ所がリストに追加して選定され、それぞれ合計で122カ所、66カ所に増加した。単一群落ではランク4(群落は全体的に壊滅状態にあり、緊急に対策を講じなければ壊滅する)が6カ所、ランク3(対策を講じなければ、群落は徐々に悪化して壊滅する)が3カ所増加し、群落複合ではランク4が1カ所、ランク3が3カ所増加していた。このため、全体として壊滅が危惧される植物群落が増加しているといえる。

動物の概要

哺乳類では、新規にDDが4種、絶滅のおそれのある地域個体群(LP)が2種付け加えられたが、ホンドノレンコウモリ(DD)以外は、海棲哺乳類であった。海棲哺乳類については生息情報が極めて少ないことから、今後の情報収集が必要である。RL2021への掲載は合計で25種となったが(RDB2016と比較して1.32倍)、これらのうちでは、コウモリ類のヒナコウモリ科が10種と多くを占めていた。

鳥類では、RL2021に10種が新規に選定され、RDB2016からは1種が削除されたので、レッドリスト種合計としては、RDB2016の57種からRL2021では66種と増加した(1.16倍)。カテゴリーがVU以上に引き上げられたのが10種、VU以上から引き下げられたのが3種であったので、全体としては、絶滅危惧危険度のカテゴリーがより高い種の数が増加した。また、生息情報が増えたことにより要注目種がNTに変更された種が多く、NT以上の種を見ると38種から59種に増加していた(1.55倍)。

両生類では、トノサマガエルのカテゴリーがVUに引き上げられ、新規にタゴガエルとヤマアカガエルの2種がNTに選定されたことから、RDB2016で8種であったのがRL2021では10種に増加した(1.25倍)。

爬虫類では、アカウミガメのカテゴリーがENに引き上げられた以外の変更はなく、レッドリスト種は5種のままであった。

汽水・淡水魚類では、新規に11種が選定された一方、1種が削除されたので、レッドリスト種はRDB2016の28種からRL2021では38種に増加した(1.36倍)。削除されたスナヤツメ類は、新たに南方種と北方種に区別されるようになったため、これらを区別して2種を新規に加えた。カテゴリーがVU以上に引き上げられたのが7種、VU以上から引き下げられたのが4種であった。その結果NT以上の種はRDB2016の24種からRL2021では28種に増加した(1.17倍)。

昆虫類では、新規に追加された種が8種であったのに対して、RDB2016から削除されたのが10種であったため、RL2021掲載種はRDB2016から2種減少して212種となった。カテゴリーがVU以上に引き上げられたのが4種、VU以上から引き下げられ

たのが1種であり、カテゴリの変更は少なかった。その結果 NT 以上の種は RDB2016 が 152 種に対して、RL2021 では 146 種とほぼ同数であった(0.96 倍)。

海岸地域の無脊椎動物類(底生動物)では、新規に追加されたのが 21 種であったのに対し、RDB2016 から削除されたのが 11 種であり、RL2021 では全体として 10 種増加し、80 種が選定された(1.14 倍)。カテゴリが VU 以上に引き上げられたのが 13 種であったのに対し、VU 以上から引き下げられたのは 1 種のみであり、全体としてより危険度が高いカテゴリの種が増加した。その結果 NT 以上の種は RDB2016 の 31 種から、RL2021 では 59 種と大きく増加した(1.90 倍)。

陸域地域の無脊椎動物類(淡水貝類)では、今回の見直しでの変更はなく、レッドリスト掲載種数は 11 種のままであった。

レッドリスト種の動向と今後の課題

全体を俯瞰してみると、多くの分類群で、RDB2016 に比べて RL2021 では掲載種数が増加していた(増加していた分類群で、1.14 倍～1.32 倍)。また、NT 以上のカテゴリに選定された種数は RDB2016 に比べて、RL2021 で大きく増加していた。植物群落においても同様で、より危機的な状況にある群落が増加していた。

これらの結果を見ると、この 5 年間で野生動植物の生育・生息環境がより危機的な状況に推移していると推察できる。カテゴリの指定が見直された種も多かったが、これは野生動植物の野外調査等で実態把握が進み、その結果がカテゴリ変更に反映されたためである。特に RDB2016 の公表は、2011 年の東日本大震災からわずか 5 年しか経過しておらず、震災直後ということもあって調査が行き届かない地域や分類群もあり、自然環境の回復がいまだ不安定な中での選定結果であった。その後の 5 年間における、野生動植物調査会の調査員の努力によって調査結果が積み重ねられた結果が今回のレッドリストの改訂で明らかにされたと言えよう。

震災や豪雨による水害あるいはそれに伴う復旧工事等においては自然環境が各所で改変された。緊急でない場合の工事の際には、その場所に生息・生育する野生動植物の保護や保全について多くの配慮がなされた一方、それらの工事で絶滅の危険度が増した種もいるものと考えられる。

東日本大震災から 10 年が経過し、復旧工事のほとんどが終了する時期になっている。今後、野生動植物は、自然の営みの中で個体群の回復を遂げていくものと思われるが、人為による影響が止まることはないだろう。希少な生物種の現状を把握し、それらの種の保護・保全を考え、ひいては生物多様性を保持していく方策を編み出し、実践していくことは今後の大きな課題である。今回のレッドリストの改訂(宮城県レッドリスト 2021)を踏まえて、宮城県が 2016 年に発行したレッドデータブックの改訂につなげていくための現況把握が継続してなされることが重要である。